

器械プロジェクト

(年～ 年 8 月)

安武一雄 ()

1 はじめに

器械運動プロジェクト（以下器械 P）は、一度 85 大阪大会に向けての支部研究体制づくりの中で他の 9 つのプロジェクトと一緒に作られている。しかしこの中で大会前後を通して組織的に活動していたのは水泳・舞踊・障害児（後に認識発達）の 3 つだけであった。

再び器械 P が実質的な活動を始めるのは、85 大会後の「ポドテキスト研究再考」の中で行われた『大村イメージマット実践』の後、その研究を引き継ぐという形であった。

2 なぜ器械 P は生まれたのか

大村イメージマット実践が生み出されたのが 86 年であるが、これは「同志会には連続技の技術指導の系統はないのでは」という、80 年冬大会で大阪支部から全国へ発信した課題に対する一つの答えであった。

当時「大阪から発信した課題」に対して「側転を含む 3 種目連続」から発展させるとした堀江（東京）実践や「歌声マットから音楽（集団）マット」を提唱した埼玉提案などが論議の俎上に上がっていた。これに対し「イメージマット」は、最初に連続技（作品）の全体イメージを与えることで「各セットと全体」や「単技と連続技」等の関係が見通しやすくなり、より子どもが主体的に連続技を創作・表現できるのではないかと考えたものである。

ただ、32 時間（内教室 12 時間）という長大な実践であったことや、誰もが実践可能な教材化ができるのかといった課題、さらには 87 年有馬大会での発表が「打ち上げ花火」に終わらせないためにプロジェクトが研究・実践を引き継ぐことになったのである。

3 器械 P の約 10 年

87 年有馬大会では、マット運動分科会の「入門講座」を安武が、「実践報告」を大村が、そして「運動文化研究 6」への報告を森下が担当したが、その 3 人を中心に器械 P が発足した。88 年度からは毎月プロジェクト会議が開かれ、89 年 2 月支部例会では当時プロジェクト長だった森下が大村実践の追試し、その比較等をしながら「イメージマットは指導系統のワンステップになり得るか？」という論議がされている。また同時に「マット運動指導の順次性（私案）」を安武が出して検討されている。

その後も 90 年「直線イメージマット」（安武）91 年「イメージマットの実践」（安武）92 年「みんなが、みんなのできるマット運動を」（森下）と毎年のようにプロジェクトでの成果を支部大会で発表・検証してきた。しかし徐々にその中身は「大村イメージマット実践以降大きな進展もないまま来た」というものであった。

それが大きく変化したのが 94 年 2 月の「体育おもしろスクール」を器械 P が担当した時であった。そのころ全国の研究課題が「教科内容研究」が盛んに言われ、支部も「競争研究」に入り出した時であった。そこでもう一度「マット運動で何を教えるのか・教えられるのか」を追求し、マット運動は「巧技的表現」を教えるもので、その時のキー概念を表現の「基準」性と考え「採点基準」に注目するようになった。

ただその後、支部大会が種目別でなく階梯別になったこともあり、正確にはわからないが器械 P も活動が下火になり、97 年度スタート時には水泳・球技・認識発達の 3 プロジェクトになっていた。